

小林芳規著『小林芳規著作集 第三巻 上代文献の訓讀』

本書は『小林芳規著作集』全八冊のうち、第三巻にあたる。本書の内容は「古事記」「日本書紀」「上代木簡」を対象とした、漢文訓読や用字法に関わる論考、音訓表、資料解題など、多岐にわたる。

第三巻の構成は以下のとおりである。「古事記の訓讀と漢文訓讀史——「心前」の訓讀をめぐって——」、「古事記序文の訓み方」「漢文の古訓點から觀た古事記の訓讀（上）——序文の訓み方——」「漢文の古訓點から觀た古事記の訓讀（下）——本文の訓み方——」「古事記音訓表（上）」「古事記音訓表（下）」「古事記における推量表現とその表記との関係」「古事記の熟字とその訓みについて」「古事記の用字法と訓讀の方法——訓注よりの考察——」「古事記の「千引の石」」「古事記訓點史」「伊勢神宮藏古事記（春瑜本）解題」「The *Kun* Readings of the *Kojiki*」「日本書紀古訓と漢籍の古訓讀——漢文訓讀史よりの一考察——」「日本書紀における大江家の訓讀について」「日本書紀古訓私見」「上代における『文選』の訓讀」「平城宮木簡の漢字用法と古事記の用字法」「字訓史資料としての平城京木簡——古事記の用字法との比較を方法として——」「飛鳥池木簡に見られる七世紀の漢文訓讀語について」、以上 20 編からなる。（遠藤佳那子）

（2022年7月8日発行 汲古書院刊 A5判縦組み 480頁 定価15,400円 ISBN 978-4-7629-3662-3）

広瀬友紀著『子どもに学ぶ言葉の認知科学』

子どもの言い間違いやテストの珍解答を手がかりとして、人間がどのように言語知識を習得、運用し、文を理解するのかを考える。同著者による『ちいさい言語学者の冒険——子どもに学ぶことばの秘密——』（岩波書店、2017）では未就学児の言葉を題材としたが、本書では主に小学生以降の子どもの言語活動に着目する。

本書は次のとおり全7章からなる。「第一章 習わないのにわかっていることば——言語習得とその先」「第二章 逆さま文字、何が逆さま？——文字の認知」「第三章 英語にあって日本語にないもの？——目的語と関係節、そして主語？」「第四章 日本語って難しいの？——文理解と曖昧性」「第五章 小さい「っ」の正体——特殊モーラと音声知覚」「第六章 なぜ会話が通じるのか——語用論」「第七章 頭の中の辞書をひく——メンタル・レキシコン」、以上である。（遠藤佳那子）

（2022年7月10日発行 筑摩書房刊 新書判縦組み 234頁 定価946円 ISBN 978-4-480-07493-5）

広瀬友紀著『ことばと算数——その間違いにはワケがある——』

子どもの算数での間違いと言葉の問題とを関連付け、人間の認知の仕組みについて考える。

本書の構成は次のとおりである。「第1章 カッコつけるのやめたら」では、数式の構造と文の構造の類似性、「第2章 どっちから見る？」では、記号や図解における抽象的概念の理解や視点の転換などについて、「第3章 正三角形は二等辺三角形に入りますか問題」では、数学的解釈と語用論的解釈の衝突について述べる。「第4章 1+1 って言ってみて！」では、数式と言語の語順について、「第5章 かける数とかけられる数は同じだった？」では、かけ算の順序の問題とは別に、日本語の文法的特徴が背景にあることに言及される。「第6章 マイナスを引くと……とってもマイナス？」では二重否定表現や言語一般の再帰性との関係について、そして「第7章 ジブンデ。ミツケル。」では、言語習得にも見られるような、限られた例から類推して過剰一般化や過剰な特殊化を行う例について取り上げる。

（2022年7月14日発行 岩波書店刊 B6判横組み 126頁 定価1,430円 ISBN 978-4-00-029712-7）

横山晶子著『0から学べる島むに読本—琉球沖永良部島のことば』

本書は、奄美群島沖永良部島における方言（しまむに）のなかでも国頭方言をベースに、初学者、児童生徒や外国人などの多様な読者を想定して作られたワークブック式の方言解説書である。説明文にはすべてルビが付され、体系的に理解できるような構成をとっている。学校教育の一環としての方言学習のほか、方言を楽しみながら学びたいといったことも含め、多様なニーズに応えられる書となっている。

本章の構成は、「しまむに音節表」が冒頭にあり「1章 しまむに概論」では「しまむに」の特徴や地域差を概観する。「2章 音」では、日本語の音との対応関係や日本語にない音を解説する。「3章 語と活用」では、名詞・動詞・その他の品詞を取り上げる。また、「4章 文法」では焦点助詞「どう」や、終助詞など豊富な用例とともに解説する。「5章 会話教材」では挨拶・自己紹介・場面別会話などを取り上げる。付録として、語彙リストと動詞活用表が付く。（椎名渉子）

（2022年7月16日発行 ひつじ書房刊 B5判横組み 160頁 定価3,080円 ISBN 978-4-8234-1158-8）

金澤裕之著『スキマ歩きの日本語学——言語変化のダイナミズムを紡ぐ——』

既発表の論文や研究ノートなど20編に書き下ろし2編を加え、著者の研究の歩みに即して5部構成に編集したものである。「I 模索期」には、真田信治先生と「社会言語学」との出会いや、各種演芸資料との出会いを背景とする研究の軌跡が収められる。「II 邁進期」は、落語SPレコードを資料とする近代大阪語に関わる研究、「III 遍歴期」は、「助動詞「ない」の連用中止法について」をはじめとする、現代日本語を対象とする研究論文がまとめられる。「IV 恬静期」には、「ふたたびデータに」という副題のとおり、SP盤演説レコードに関わる一連の研究が、最後の「V 展望」には、「若者の言葉から見た日本語の未来」「補助動詞「こなす」の拡張について」の2編が収められる。（遠藤佳那子）

（2022年7月30日発行 花鳥社刊 A5判横組み 307頁 定価5,500円 ISBN 978-4-909832-59-7）

三保忠夫著『古代における文字文化と数量表現』

古代の資料を再検討し、その文字文化と数量表現について考究する。本書は全3部からなる。「第一部 古代における文字文化」では、後漢から七世紀にかけて各時代の資料を取り上げ、時系列に沿って倭人の文字文化について論じる。「第二部 馬の伝来とその数え方」では、「第一章 馬の伝来」「第二章 馬の数え方——「匹（ヒキ）」」「第三章 『日本書紀』歌謡の「耶都擬（やつぎ）」」「余論 「筆策（ヒチリキ）」について」をとおして、「疋」訓について再考する。「第三部 『日本書紀』の数量表現」は前章と関連して『日本書紀』の数量表現に焦点をあてる。構成は「第一章 『日本書紀』の数量表現」「第二章 『釈日本紀』の数量表現」「余論 『日本書紀私記』御巫清白氏蔵本の助数詞表現」である。巻末に「書名索引」「人名索引」「事項索引」を付す。（遠藤佳那子）

（2022年8月20日発行 和泉書院刊 A5判縦組み 424頁 定価円 ISBN 978-4-7576-1044-6）

李光赫・趙海城著『条件文の日中対照計量的研究—KH Coder と SPSS を利用した可視化分析』

本書は、対訳コーパスを利用した対照研究の量的研究のための解説と論考がまとめられた書である。ひつじ研究叢書〈言語編〉第188巻として刊行された。前半部には解説として一般的なソフトを利用した対訳コーパス作成方法のほか、KH Coderに取り入れ対訳関係を分析する手法など、コーパス研究の方法が具体的に示されている。また、後半部は順接条件ト・タラ・バ形式とその中国語訳に関する論考がま

とめられる。

本書の構成は次のとおりである。「序文」「はじめに」につづき、「序章 翻訳研究とコーパス」,「第1章 PDF で日中対訳コーパス構築」,「第2章 日中対訳ネットワーク分析方法」,「第3章 SPSS による日中対訳対応分析方法」,「第4章 多言語対訳パラレル表示ツールの使い方」,「第5章 ト条件文の意味分類」,「第6章 タラ条件文の意味分類」,「第7章 バ条件文の意味分類」,「第8章 ト・タラ・バの違い」,「第9章 ト条件文の日中翻訳定量研究」,「第10章 タラ条件文の日中翻訳定量研究」,「第11章 バ条件文の日中翻訳定量研究」。末尾に「索引」を付す。(椎名渉子)

(2022年8月26日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 202頁 定価7,480円 ISBN 978-4-8234-1113-7)

千葉修司著『エンパシー制約にみられる言語変化と語用論—日本語古典から現代英語まで—』

本書は、英語の動詞 meet をはじめとする主語志向動詞に関する語用論的用法の変遷を解き明かす研究書である。現代の英語動詞 meet には語順の制約があるが、その変遷を辿ると日本語の古語「会ふ」の用法と類似する点が見られることを指摘する。本書は開拓社言語・文化選書第95巻として刊行された。

本書の構成は次のとおりである。「はしがき」につづき「第1章 日本語の場合」には、「1.1.『伊勢物語』」,「1.2. 柳田 (1992, 2011) の研究」。「第2章 現代英語の場合」には、「2.1. Kuno and Kaburaki (1977) のエンパシー研究」,「2.2. 久野・高見 (2017) 第2章「相互動詞の特異性」より」。「第3章 中英語(ME), 近代英語(ModE)の場合」には「3.1. 中英語」,「3.2. 近代英語」,「3.3. 19世紀以降の例の中から」,「3.4. 辞書の中での説明」,「3.5. インド英語などの用法」,「3.6. エンパシー制約違反とならない場合」,「3.7. 残された問題」,「3.8. 言語獲得との関わりから見たエンパシー制約」。「第4章 受け身形と完了形としての be met」には「4.1. 受身形の場合」,「4.2. 完了形の場合」。末尾に「参考文献」と「索引」を付す。(椎名渉子)

(2022年8月26日発行 開拓社刊 四六判横組み 208頁 定価2,310円 ISBN 978-4-7589-2595-2)

金澤裕之・山内博之編『一語から始める小さな日本語学』

文法研究や語彙研究が、それぞれに初心者にとって敷居の高くなった面があることに對し、本書は「1つの実質語に着目して、「小さな日本語学」の研究を行なってはどうか」という提案をするものである。「第1部 日常のやりとりから」では、日常会話に用いられる表現「わーい」,「って感じ」,「それこそ」が取り上げられる(各執筆者は小西円, 小口悠紀子, 榊田直美)。「第2部 学生とのやりとりから」では、学生による「教授」,「生徒」,「子」それぞれの語の使い方の問題(各執筆者は山内博之, 建石始, 本多由美子)。「第3部 日本語学習者とのやりとりから」では、日本語学習者による「親切」,「どうぞよろしく」,「やっぱ(やはり)」,「あんばい」の各表現の問題(各執筆者は加藤恵梨, 田中祐輔, 奥野由紀子, 嶋ちはる)を扱う。「第4部 趣味の中から」では、オノマトペの「さっくり」を切り口として料理に関する語(橋本直幸)、「ヘイト」という語の意味拡大(中俣尚己), 談話における「いろいろ」の機能(岩田一成)について、そして「第5部 副産物いろいろ」では、副詞「きっかり」(中石ゆうこ)、「深める」(森篤嗣)、「ジャスト」(茂木俊伸)について考察される。(遠藤佳那子)

(2022年8月31日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 258頁 定価2,600円 ISBN 978-4-8234-1148-9)

荻野綱男編『敬語の事典』

本書は、敬語の多様な側面を総合的に取り上げた事典である。敬語を言語体系だけではなく言語行動の一部としての敬語行動に広げてとらえ、その運用面についての項目も扱っている点が大きな特徴といえる。これまで個々の論文等で論じられてきたテーマを体系立て、総合的に解説するものである。

本書は5章から成り、「はじめに」につづき、編集者と各節の執筆者が記される。「第1章 敬語のとらえ方」には、「1.1 敬語の理論・考え方」、「1.2 敬語体系」、「1.3 敬語行動」、「1.4 敬語の機能」、「1.5 敬語の周辺」が含まれる。「第2章 敬語の多様性」は、「2.1 敬語の変遷」、「2.2 方言の敬語」、「2.3 敬語の年齢差」、「2.4 敬語の男女差」、「2.5 敬語の職業差」、「2.6 場面と敬語」、「外国語の敬語との対照」で構成される。「第3章 敬語の研究法」は、「3.1 敬語の研究法」、「3.2 敬語の数量化の手法」、「3.3 敬語研究史」から構成される。「第4章 敬語の教育」には、「4.1 学校の敬語教育」、「4.2 日本人の敬語の誤用」、「4.3 敬語政策」、「4.4 日本語教育における敬語」、「4.5 韓国人の敬語の誤用」、「4.6 中国人の敬語の誤用」、「4.7 アメリカ人の敬語の誤用」。「第5章 周辺分野との関連」は、「5.1 自然言語処理と敬語」、「5.2 文化人類学と敬語」、「5.3 心理学と敬語」、「5.4 社会心理学と敬語」で構成されている。末尾に「索引」が付く。(椎名渉子)

(2022年9月1日発行 朝倉書店刊 A5判縦組み 704頁 定価16,500円 ISBN 978-4-254-51069-0)

石原和・菊澤律子編『手話が「発音」できなくなる時—言語機能障害からみる話者と社会—』

本書は、2013年12月1日に開催された『みんなくセミナー 暮らしの中の言語学「言葉の機能障害と言語学」』における講演と討論の内容をまとめたものである。交通事故で手話が部分的に「発音」できなくなった例をとりあげ、法律上の解釈やアメリカの事例なども含めながら手話という言語と社会について考える。講演録というかたちをとり、当日配布された資料も掲載されている。

本書の構成は次のとおりである。「はじめに—「交通事故裁判」と「言語学」(菊澤律子)」、「第1章 交通事故手話裁判と手話言語(原大介)」、「第2章 音声言語の構音障害の判定(藤原百合)」、「第3章 音声言語と手話言語における音韻特性の種類と言語機能障害(那須川訓也)」、「第4章 機能障害と言語的要素の認識(市田泰弘)」、「第5章 障害等級認定基準の方法と意味(藪之内寛)」、「第6章 暮らしの中の言語学「ことばの機能障害と言語学」へのコメント(スーザン・フィッシャー)」、「第7章 パネルディスカッション(原大介、藤原百合、那須川訓也、市田泰弘、藪之内寛、スーザン・フィッシャー、菊澤律子)」、「補章 暮らしの中の言語学「ことばの機能障害と言語学」Q&A」、「おわりにかえて—手話初心者が読む『手話が「発音」できなくなる時』(石原和)」。末尾に「謝辞」と「参考文献」を付す。(椎名渉子)

(2022年9月5日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 144頁 定価1,870円 ISBN 978-4-8234-1156-4)

風間伸次郎著『日本語の類型』

本書は、アルタイ諸言語を専門とする著者の論文のうち、日本語の類型に関する論考21編に、書き下ろし2編を加えた論文集である。本論の前に「第0章 アルタイ諸言語の分布と系統」として概説を配する。

第1章以下の構成は次のとおりである。「第1章 ことばの癖いろいろ」「第2章 日本語の類型について」「第3章 アルタイ型言語の語順特性およびそれと内的関連性を持つ諸特徴について」「第4章 日

本語（話しことば）は従属部標示型の言語なのか？」「第5章 アルタイ諸言語における複数形式の定性について」「第6章 アルタイ諸言語の場所表現における名詞的性格について」「第7章 地域的・類型論的観点からみた無生物主語について」「第8章 アルタイ諸言語と朝鮮語、日本語におけるいわゆる「再帰代名詞」の対照研究」「第9章 アルタイ型言語における感情述語」「第10章 アルタイ型言語における命令形の反語用法・条件用法について」「第11章 対照言語学的観点からみた相対テンスについて」「第12章 ナーナイ語の複文について」「第13章 アルタイ型言語における「補助動詞」の分布について」「第14章 条件と継起の連続性について」「第15章 アルタイ型言語における準動詞と言いさしについて」「第16章 アルタイ型言語における主要部内在型関係節について」「第17章 コピュラ文の諸相」「第18章 語順と情報構造の類型論」「第19章 アルタイ型言語におけるモダリティの意味領域地図について」「第20章 東北アジアの諸言語を中心とする証拠性に関する対照研究」「第21章 八丈型基層言語と日本語の重層性」，以上である。（遠藤佳那子）

（2022年9月5日発行 三省堂刊 A5判横組み 671頁 定価5,500円 ISBN 978-4-385-36504-6）

林巨樹・池上秋彦・安藤千鶴子編『日本語文法がわかる事典 新装版』

本書は、2004年に刊行した『日本語文法がわかる事典』の新装版として四六判からA5判に拡大し、リニューアルされたものである。初学者から研究者まで幅広い読者層を想定してまとめられている。日本語文法に関する基本事項・術語270項目を50音順に配列し、各項の説明には、現代文と古文を取り上げた例文、簡潔で分かりやすい定義、解説、補説が付されている。執筆は、編者に加え、秋元美晴、安藤千鶴子、池上秋彦、小野正弘、北村弘明、鈴木浩、堀崎葉子、渡部圭介が担当している。本書は「はしがき」、「凡例」、「執筆者紹介」、「項目一覧」につづき本編となる。末尾には「口語・文語対照助動詞一覧表」、「口語・文語対照助動詞一覧表」、「主要助動詞索引」、「主要助動詞索引」が付く。（椎名渉子）

（2022年9月30日発行 東京堂出版刊 A5判縦組み 320頁 定価2,860円 ISBN 978-4-49010-935-1）

近代語学会編『近代語研究 第二十三集』

近代語学会による論文集である。学史、辞書史、音韻、語彙、文法など多岐にわたる論考を収載する。構成は以下のとおりである。『両足院本毛詩抄』の疑問表現——「そ・やら・か」の用法——（山田潔）「抄物における「影略互見」について——用例を中心として——（坂詰力治）」「中世文語」とは何か——「文語」の二義性と国語学史上の空白——（田和真紀子）「女中ことば集の系譜（前編）——新出の元禄五年本をめぐって——（松井利彦）」「近世音韻学における促音挿入形——『かたこと』『倭語連声集』『漢字三音考』——（肥爪周二）」「漢語の語性（今野真二）」「鈴木胤の「心の声」——『言語四種論』読解——（小柳智一）」「『雅言集覧』における『栄花物語』用例（平井吾門）」「『蜘蛛絲梓弦』の仙台浄瑠璃に関して（長崎靖子）」「上方のオーキニの発生と定着（田島優）」「夢酔独言の動作性謙讓表現 付・オル（小松寿雄）」「江戸時代末期人情本にみられる「です」の待遇価値再考——人情本の「です」は謙讓語ではない——（浅川哲也）」「辞書における挿絵の展開——一九世紀の英和辞書、国語辞書、和英辞書を資料として——（木村一）」「「遊星」から「惑星」へ——明治時代以降を中心に——（米田達郎）」「節用集終焉期の諸相——昭和期点描——（佐藤貴裕）」「所謂「さ入れ言葉」の一表現について——「そうだ」が下接する場合——（丸田博之）」「授受補助動詞における用法・機能拡張——「ていただく」を中心に——（伊藤博美）」「昭和前期台湾における国語の「誤用」とその頻度（園田博文）」「大正14年度『読売新聞』記事に見る方言関連の言語意識（新野直哉）」「漱石作品における「で

あった」「だった」の様相（北澤尚）」「『哲学字彙』の見出し語とフェノロサ講義「哲学史」（真田治子）」「明治期日本語学習書の仮名表記——『春秋雑誌会話篇』製版本と活版本とを比較して——（常盤智子）」「明治初期の口語体啓蒙書における一人称代名詞——近代の口語体実用文との関係性の検討——（近藤明日子）」「明治初期語彙の文体差と意味的特徴——文化・歴史・風俗・禍福の語彙を例に——（田中牧郎）」「『改正増補蛮語箋』の「草」部と「木」部について（下）（櫻井豪人）」「近世後期江戸語における丁寧な言葉遣い——〈行く・来る〉を例にして——（山田里奈）」「近世上方の「ねま（寝間）」について（村上謙），以上 27 編から成る。（遠藤佳那子）

（2022 年 9 月 5 日発行 武蔵野書院刊 A5 判縦組み 587 頁 定価 16,830 円 ISBN 978-4-8386-0769-3）

鎌田修監修代表，鎌田修・由井紀久子・池田隆介編『日本語プロフィシェンシー研究の広がり』

本書は，第二言語としての日本語の言語知識に基づいた機能的運用能力・実力に関する論考がまとめられた書である。従来，日本語教育・日本語学習・日本語使用の研究領域では取り上げられてこなかった題材を扱った論考もあり，日本語プロフィシェンシー研究の発展性が示された書である。本書の構成は以下のとおりである。「はじめに」と「各部キーワード・キーフレーズ一覧」「プロローグ プロフィシェンシー研究の広がり 一分かり合える日本語による共生探索（鎌田修）」につづき，「第 1 部 ソーシャルエンゲージメントとプロフィシェンシー」には，「視覚に障害のある日本語学習者の社会参加とプロフィシェンシー（北川幸子）」，「コーダである私に映る日本の共生とプロフィシェンシー（中井好男）」，「移民定住者とプロフィシェンシー —日本語の習得、摩滅、喪失の過程とライフを視野に入れつつ（野山広）」，「社会・コミュニティ参加とプロフィシェンシー（佐藤慎司・嶋津百代）」。「第 2 部 流暢さ、非流暢さとプロフィシェンシー」には，「非流暢で自然な日本語：記述言語学の観点から（定延利之）」，「非流暢で自然な日本語：コーパス言語学の観点から（丸山岳彦）」，「非流暢で自然な日本語：会話分析の観点から（遠藤智子）」，「非流暢で自然な日本語：言語障害の観点から（林良子）」，「非流暢で自然な日本語：日本語教育の観点から（船橋瑞貴）」。「第 3 部 談話とプロフィシェンシー」には「不満語りに見られる会話参加者の協働性（三井久美子）」，「「聞き手」としての非母語話者の容認性判断（堤良一・閻琳）」，「初対面時の雑談でもちいられる終助詞「ネ」（立部文崇）」，「雑談における日本語母語話者と中国語母語学習者のノダの使用状況（范一楠）」，「説明タスク作文での接続詞使用 —読み手評価から見た接続詞の選択（長谷川哲子）」，「自然会話を素材とする共同構築型 Web 教材 NCRB —自然会話データの分析を踏まえて（宇佐美まゆみ）」。「第 4 部 ライティングとプロフィシェンシー」には，「ライティング評価の限界と正しい取り（田中真理）」，「教材開発から考える「書くプロフィシェンシー」の向上 —作文コーパスをもとに（白鳥文子・塚田智冬）」，「ライティング関連科目のシラバスの特徴 —「概要・目標」と「授業内容」の記述内容の対比（池田隆介・山路奈保子）」，「ライティングのプロフィシェンシーと主観性 —アカデミックな文体に関するスキーマ構築（由井紀久子）」。「第 5 部 ポストコロナを見据えた将来の日本語教育」には，「日本語オンラインコースの現状とその可能性（東健太郎）」，「ICT とプロフィシェンシー —聴解口頭クラスの実践を通じて（阪上彩子）」，「マルチメディア型データベースと評価 —リアリティのある評価を求めて（西川寛之）」，「オンラインツールを用いた OPI —直接対面 OPI に近づけるための提案（伊藤亜紀）」。「第 6 部 「共育」による教師の学び合いと成長」には，「養成課程の学生は日本語教育現場から何を学んだのか —日本語学校と大学養成課程の「共育」（麻生迪子）」，「教職課程学生と留学生の「ことば」を鍵とした協働と「共育」（和泉元千春）」，「やさしいにほんごとプロフィシェンシー —

現実の接触・共育から得られるまなび (溝部エリ子)、「OPI が可能にする教師の成長 — 「つながりと響き合い」をめざして (嶋田和子)。「7 部 第二言語習得研究とプロフィシェンシー」には、「SLA 研究における L2 能力観の変容 — 「プロフィシェンシー」再考 (岩崎典子)、「CLD 児の言語能力評価、再考 — 全人的発達を目指して (櫻井千穂)、「言語教育実践としての多言語漫才の可能性 (松田真希子)、「L2 使用者の行為主体性が促す言語社会化 — 発話スタイルの縦断的な変化に着目して (奥野由紀子)、「プロフィシェンシー再考の必要性 (坂本正)。「エピローグ プロフィシェンシーの再考と今後の展望 — JALP 設立 10 周年記念シンポジウムを終えて (伊東祐郎)」末尾には、「あとがき」と「執筆者紹介」がつく。(椎名渉子)

(2022 年 10 月 3 日発行 ひつじ書房刊 A5 判横組み 480 頁 定価 4,840 円 ISBN 978-4-8234-1137-3)

松田真希子・中井精一・坂本光代編『「日系」をめぐることばと文化—移動する人の創造性と多様性』

本書は、「日本」につながるのある人とそのことばをテーマに、日系人の葛藤と挑戦、創造的な教育実践、既存の考え方に対する批判的展開を主とした幅広い視点からの論考が集められたものである。

本書の構成は以下のとおりである。「はじめに (松田真希子)」、「第 1 章 南米日系日本語教育の創造性と多様性 (松田真希子)」、「第 2 章 ケイショウゴ教育の変遷について—オーストラリアとブラジルを例に— (トムソン木下千尋)」、「第 3 章 「違い」の感覚を生きる (福島青史, 長谷川アレサンドラ美雪)」、「第 4 章 多様化社会のファミリー・ランゲージ・ポリシー (伊澤明香)」、「第 5 章 日系 4 世の継承語・文化保持の可能性 (坂本光代)」、「第 6 章 ニッケイ・アイデンティティについて考える (水上貴雄)」、「第 7 章 スタイル万能神話の崩壊—状況に応じて、話す言語に応じて、人間 (キャラ) が非意図的に変わるといふこと— (定延利之)」、「第 8 章 自分のことばをつくっていく意味 (三輪聖)」、「第 9 章 CLD 児のことばの可視化と全人的教育 (中島永倫子, 櫻井千穂)」、「第 10 章 日系ブラジル人にとっての「日本」、そして「郷土」 (中井精一)」、「第 11 章 ブラジルに根をはる俳句・ハイカイ (白石佳和)」、「第 12 章 ポリビア日系社会の言語接触と混合言語 (ダニエル・ロング)」、「第 13 章 昆布に分散化されたアイデンティティ (尾辻恵美)」、「第 14 章 彷徨える文化、言語、アイデンティティ (岡田浩樹)、「おわりに」。また、章のあいだには 3 つのコラムが付されている。「コラム 1 複数の言語と文化に触れること (松崎かおり)」、「コラム 2 離れて眺めて、混ざる良さに気づく (サウセド金城晃アレックス)」、「コラム 3 “Why me?”—なぜ私がシドニーにいるか— (寺本不二子)」。末尾に「索引」と「著者紹介」が付く。(椎名渉子)

(2022 年 10 月 4 日発行 くろしお出版刊 A5 判横組み 338 頁 定価 3,080 円 ISBN 978-4-87424-914-7)

日本中国語学会編『中国語学辞典』

本辞書は、中国語学に関わる用語・事項・資料名 (文書・出土資料) など約 1100 項目を採録する。日本中国語学会の前身である中国語学研究会による『中国語学事典』(江南書院, 1957)、『中国語学新辞典』(光生館, 1969) 以来、50 余年ぶりに編纂された用語辞典である。四六判の比較的小ぶりの体裁ながらたいへん充実しており、歴史的な事柄や、各種資料、言語処理に関わる事項にも目配りされ、日本語学、歴史学、文学など隣接する研究分野にとっても必携の書である。巻頭に「分野別項目一覧」「中国語史略説」、巻末に付録として「参考文献」「品詞名称対照表」「方言境界線略図」「中国語索引」を収める。(遠藤佳那子)

(2022年10月13日発行 岩波書店刊 四六判横組み 743頁 定価17,600円 ISBN 978-4-00-080322-9)

影山尚之著『萬葉集の言語表現』

本書は2017年から2021年にかけて発表された論文14編に、書き下ろし2編を加えた計16編の論考からなる。萬葉集から具体的な表現を取り上げ、その意図と効果について考察する。

本書の構成は以下のとおりである。「はつ恋——萬葉集の言語表現——」「軍王の歌——舒明天皇代の行幸歌——」「人麻呂吉野讃歌——「かへり見」る吉野——」「大津皇子移葬の史と詩」「暁と夜がらす鳴けど——萬葉集巻七「臨時」歌群への見通し——」「坂上大嬢に贈る歌——距離の感覚と作品形象——」「佐保川のほとり——坂上郎女の見た風景——」「あり通ひ仕へ奉らむ万代までに——巻十七、境部老麻呂三香原新都讃歌——」「大殿の雪な踏みそね——三形沙弥歌の機知——」「悪女になるなら——紀女郎の「怨恨歌」と中島みゆき——」「けだしや鳴きし——額田王の艶と怨——」「伊勢物語八七段「むかしの歌」と萬葉集・石川少郎歌」「山之常陰」覚え書き」「しまくま山」「名次山・角の松原」「萬葉集は怖くない——狭野弟上娘子のことば扱ひ——」、以上である。巻末に「萬葉集歌索引」を付す。(遠藤佳那子)

(2022年10月20日発行 和泉書院刊 A5判縦組み 274頁 定価円 ISBN 978-4-7576-1048-4)

井上史雄・田邊和子編『社会言語学の枠組み』

本書は、社会言語学の入門書である。変異を扱う方向と談話を扱う方向を組みあわせる体系的な枠組みを採用し、学問分野全体を見渡せる工夫がなされている。また、理論の紹介にとどまらず、各章に調査課題を付すなど、初学者が自分の研究における分析視点を養えるような実践的な構成をとっていることが特徴である。「まえがき」につづき、「第1章 社会言語学の枠組み：動向と展望(井上史雄)」、「第2章 言語と社会の規定関係(堀江薫)」、「第3章 言語間の格差(渋谷勝己)」、「第4章 標準語の方言(塩田雄大)」、「第5章 ことばの性差(山下早代子)」、「第6章 集団語(井上史雄・田邊和子)」、「第7章 敬語と社会(井上史雄)」、「第8章 日本語の文字：変異・政策・景観(笹原宏之)」、「第9章 談話の規則性(小野寺典子)」、「第10章 談話と言語のバリエーション：その規則性と創造性(泉子・K・メイナード)」)。末尾に、「索引」を付す。(椎名渉子)

(2022年11月25日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 224頁 定価2,420円 ISBN 978-4-87424-919-2)

紙尾康彦著『自分で読むための基礎日本古典語』

高校で教鞭を執る筆者による日本古典文法の学習書である。読者として「大学の専攻で古典語を学ぶ方や、古典作品を扱う方を対象とした」とあるとおり、高校で学習する内容の復習から入り、参考書の基礎的知識の学習ができるよう設計され、高校での学習に不安があったり、古典文法を復習したい大学生にとって、ちょうど良い内容である。また、演習問題とは別に「講義」と「発展」が備えられており、「講義」では現代語訳のための具体的知識や用語や文法項目の研究史に触れ、「発展」では専門的な内容への橋渡しとなるような概説を行う。(遠藤佳那子)

(2022年11月25日発行 くろしお出版刊 B5判縦組み 182頁 定価2,420円 ISBN 978-4-87424-918-5)

西川朋美編著,窪津宏美・櫻井千穂・池上摩希子・齋藤ひろみ・バトラー後藤裕子・中石ゆうこ・高橋朋子著『外国につながる子どもの日本語教育』

本書は、外国にルーツを持ち、日本語を第二言語とする子どもたちの「言語」の課題について論じられた書である。日本の小中学校または高等学校に在籍する外国人児童生徒が年々増加する昨今、現状把握を含めた幅広い知識を得られる書となっている。

本書の構成は以下のとおりである。「はじめに」につづき「第1部「子どもの日本語教育」の実態」には、「第1章 公立小学校での「子どもの日本語教育」を知る（窪津宏美）」、「第2章 日本社会の中の「子どもの日本語教育」を知る（西川朋美）」。「第2部「子どもの日本語教育」の実践」には、「第3章 子どもの日本語力を評価する（櫻井千穂）」、「第4章 子どものための日本語教材を使う・作る（池上摩希子）」、「第5章 教科学習と日本語学習をつなぐ（齋藤ひろみ）」。「第3部「子どもの日本語教育」で育てる言語の力」には、「第6章 教科学習に必要な言語力について考える（バトラー後藤裕子）」、「第7章 子どもの第二言語習得について知る（西川朋美）」、「第8章 日本語という言語を外から見る（中石ゆうこ）」、「第9章 母語・継承語も育てる（高橋朋子）」。また、各章のあいだには次のようなコラムも付されている。「Column 01 就学前の子どもたちに必要な支援（松本一子）」、「Column 02 中学生に必要なつながりを生む支援（樋口万喜子）」、「Column 03 高校卒業後も日本社会で生きていくための支援（坂本昌代）」、「Column 04 散在地域での「子どもの日本語教育」（青木由香）」、「Column 05 外国人児童生徒だった経験から学んだこと（PINILLOS MATSUDA, Derek Kenji)」。末尾に「おわりに」、「索引」、「執筆者紹介」を付す。（椎名渉子）

（2022年11月30日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 208頁 定価2,420円 ISBN 978-4-87424-920-8）

瀬戸賢一・宮畑一範・小倉雅明編著『現代レトリック事典』

本書は、レトリックの表現技法を総合的にまとめた事典である。見出し語は絞られ、わかりやすく技法が並べられられているだけでなく、「共感覚法」や「自虐法」などといったこれまでのレトリック辞典・事典では取り上げられていない新項目も記載されている。また、現代の身近な素材から多くの用例を掲げている点も特徴である。

本書の構成は以下のとおりである。「はじめに」、「凡例」、「ギリシア以来の歴史と対話のレトリック」、「レトリック技法解説」につづき、「意味のあや」、「形式のあや」、「思考のあや」に分かれて72項目が掲げられている。「意味のあや」には「シミリー」「メタファー」など19項目、「形式のあや」には「押韻法」「句読法」など22項目、「思考のあや」には「ためらい法」「毒舌法」など31項目がある。末尾に「参考文献」、「引用文献」、「あとがき」、「日英用語対照表」、「英日用語対照表」、「索引」、「図版・歌詞引用等出典」、「編著者紹介」が付く。（椎名渉子）

（2022年12月1日発行 大修館書店刊 A5判横組み 612頁 定価8,800円 ISBN 978-446-901291-0）